知財インテリジェンスの青写真：生成AIが導く「共創型」知財組織へのパラダイムシフト

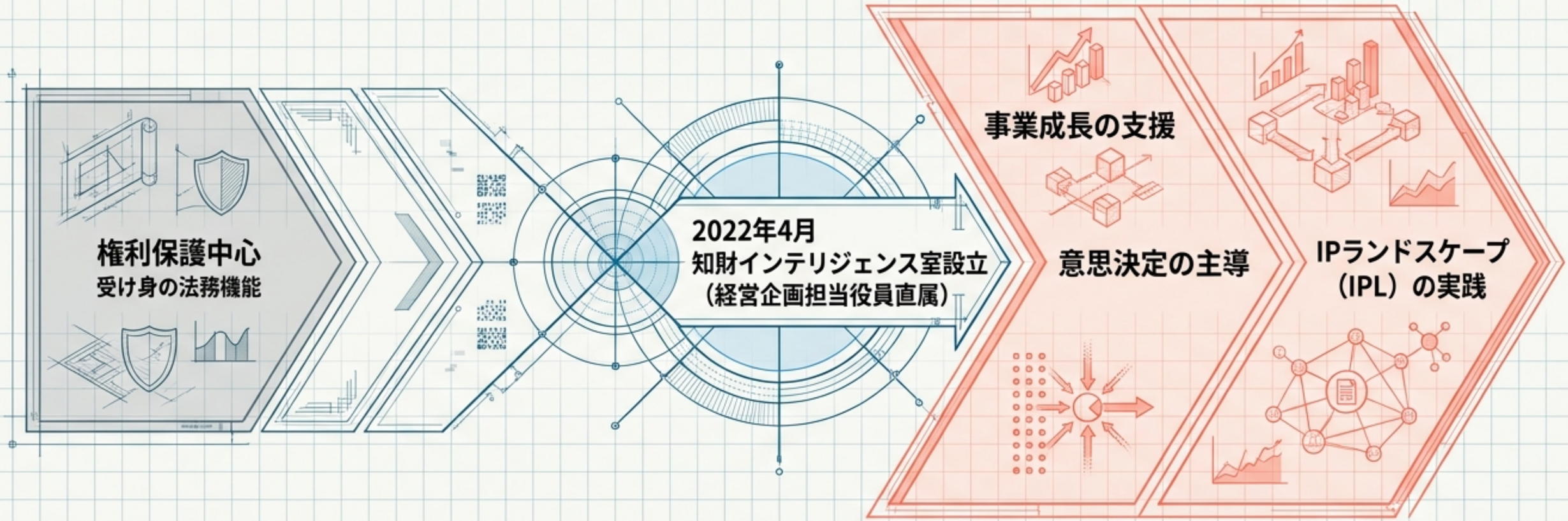
旭化成・知財インテリジェンス室における
AI実践と提供価値の高度化



Case Study: Asahi Kasei Corporation

Gemini Notebook

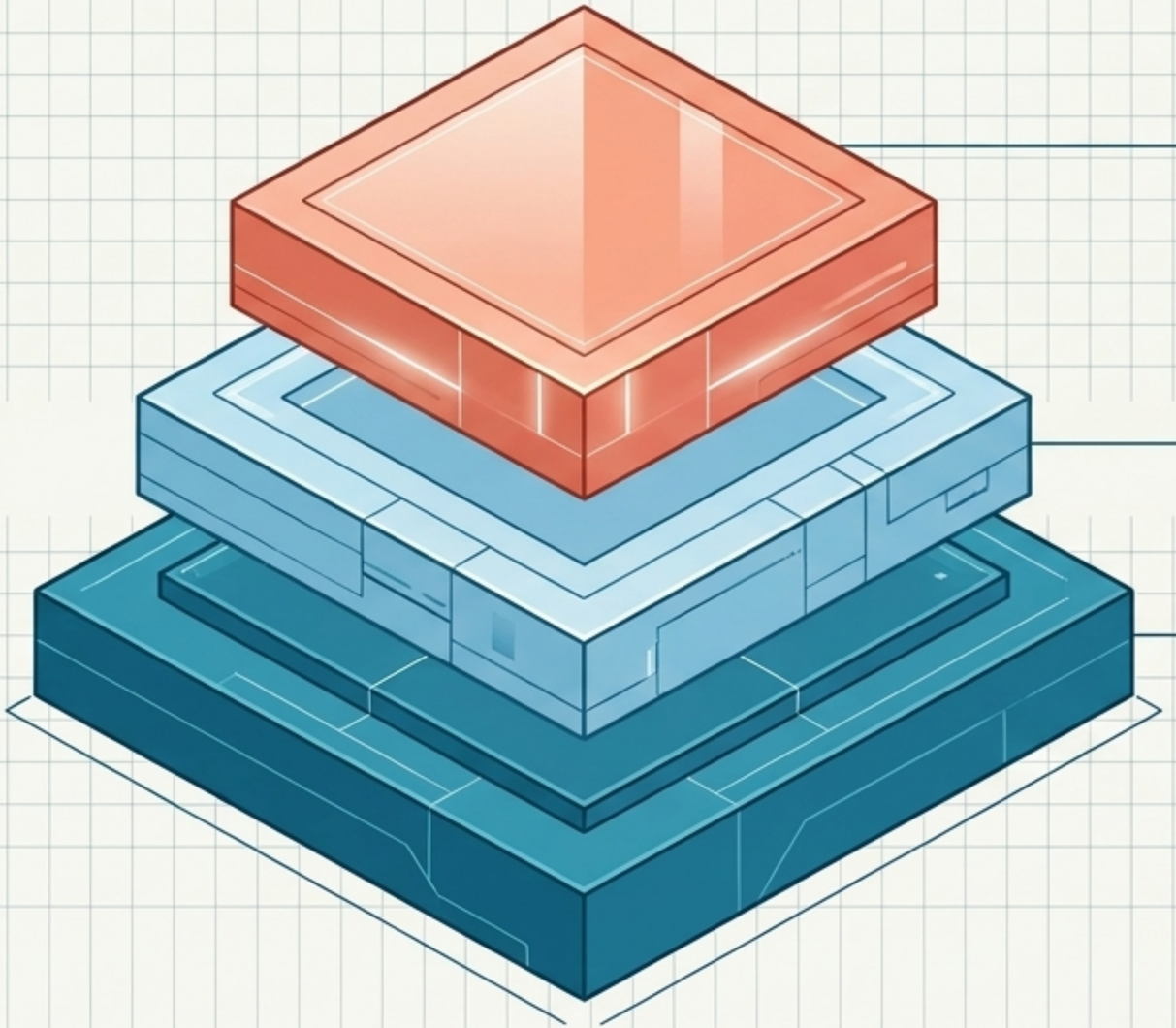
守りの知財から、事業を牽引するインテリジェンスへ



技術革新の加速と競争激化を背景に、知財部門の役割を再定義。特許情報と市場・競合データを統合解析し、経営層や事業領域の意思決定を直接支援する専任組織を立ち上げた。

Gemini Notebook

変革を支える強固な全社デジタルエコシステム



【成果・実績】

月間2,157時間の業務削減実績

（2024年12月公表時点）

【開発・運用基盤】

「生成AIモデル利用基盤」（2023年12月公開）。
専門組織（生成AI・言語解析ユニット等）による
内製・運用技術支援体制。

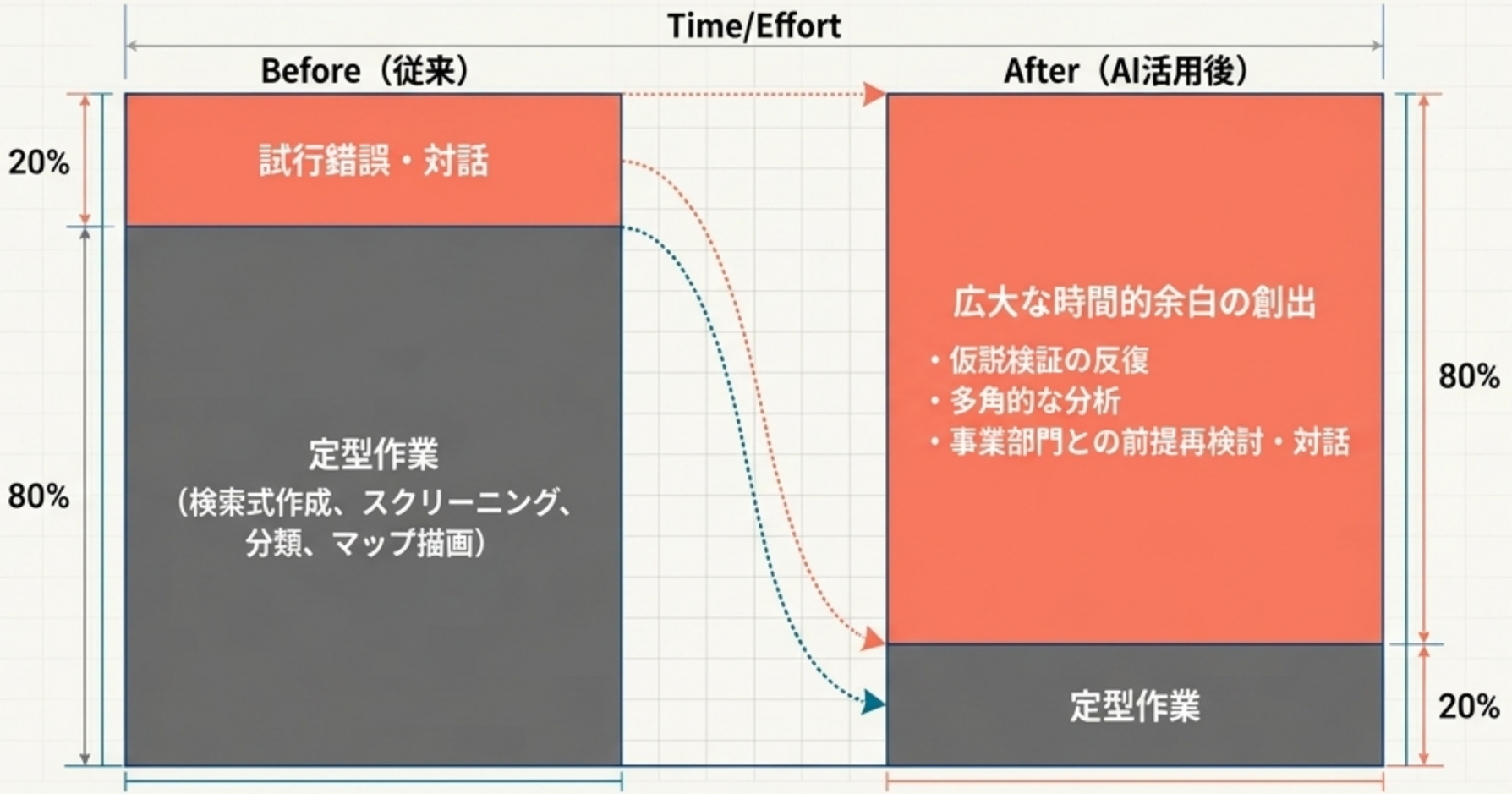
【全社教育基盤】

「旭化成DXオープンバッジ」による全社的な
生成AI人材育成。全従業員のリテラシー底上げ。

一部の属人的な天才に依存するのではなく、
全社的なデジタルプロ人材が自らの業務に合わせて
AIを活用・実装できるインフラが完成している。

Gemini Notebook

The Reallocation Concept：AIは「削る」ためではなく「生み出す」ためにある



AIによる効率化の真の目的は、時短ではなく、事業価値を深化させるための高度な知的作業へとリソースを再配分することにある。

Gemini Notebook

知財実務のパラダイムシフト：従来型調査からインテリジェンスへ

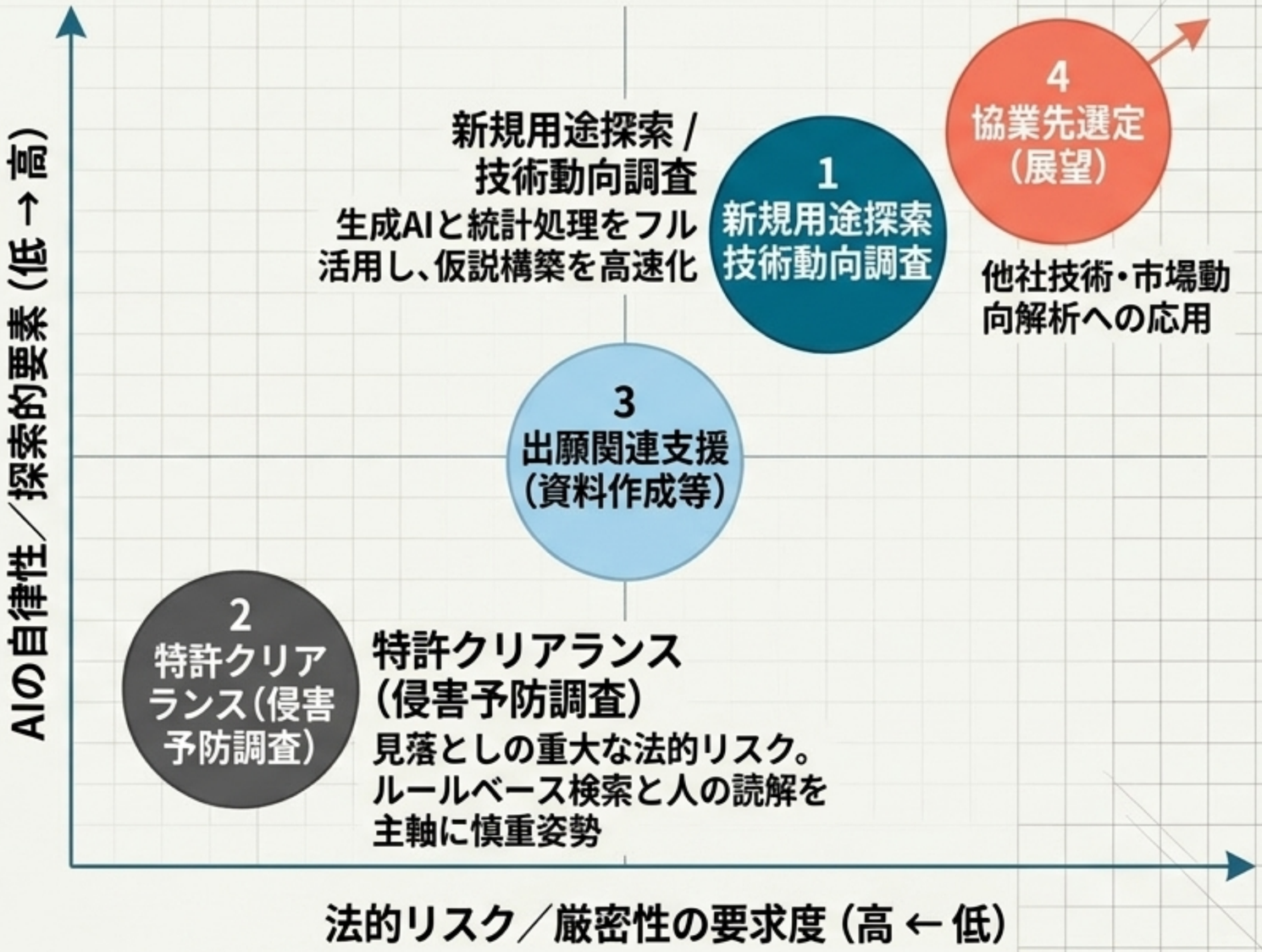
ツールへの作業委任により、知財担当者の主戦場は「読解」から「戦略ストーリー構築」へ移行した。

	一般的な知財調査・従来型	旭化成・知財インテリジェンス室の目指す実践像
主たる目的	業務時間短縮、ドキュメント作成の迅速化、定型調査の省力化	仮説検証の試行錯誤の最大化、意思決定精度の向上、事業事提案の質の深化
知財担当者の主業務	大量文献の目視読解、機械的な分類作業、マップ作成	意思決定の問いの設定、自社文脈による情報再構成、戦略ストーリー構築
AIの活用形態	単発のプロンプトによる要約、文書ドラフトの機械的生成	各工程へのツール適用、統計処理とLLMの連携による探索支援
事業部門との関係	依頼に基づく受動的な分析レポートの納品	共通データを媒介とした認識合わせ、事業施策への関与と伴走

Gemini Notebook

業務特性に応じたAI適用ポートフォリオ

すべての業務を一律にAI化するわけではない。動向調査における「許容される誤差」と、クリアランスにおける「重大な法的リスク」の違いを見極め、領域ごとに最適なアプローチを選択している適材適所の戦略。



Gemini Notebook

実践事例：統計処理と生成AIの融合による「用途探索支援AI」



【特許文献データ】

【統計処理AI】
用途や材料の特徴を抽出し、無数のデータをクラスタリング（群化）

【生成AI（GPT-4o等）】
形成されたクラスタ群に対し、状況に応じて最適なLLMを使い分け解析

【意味的ラベリング】
人間に理解可能なラベル（例：「接着剤」「フィルム材料」「タイヤ材料」）を付与

担当者の経験則やドメイン知識に依存した「発想の偏り」を打破。専門人材と事業領域が連携し、埋もれた新たな用途の可能性を機械的に、かつ意味を伴って引き出す独自のアーキテクチャ。

Gemini Notebook

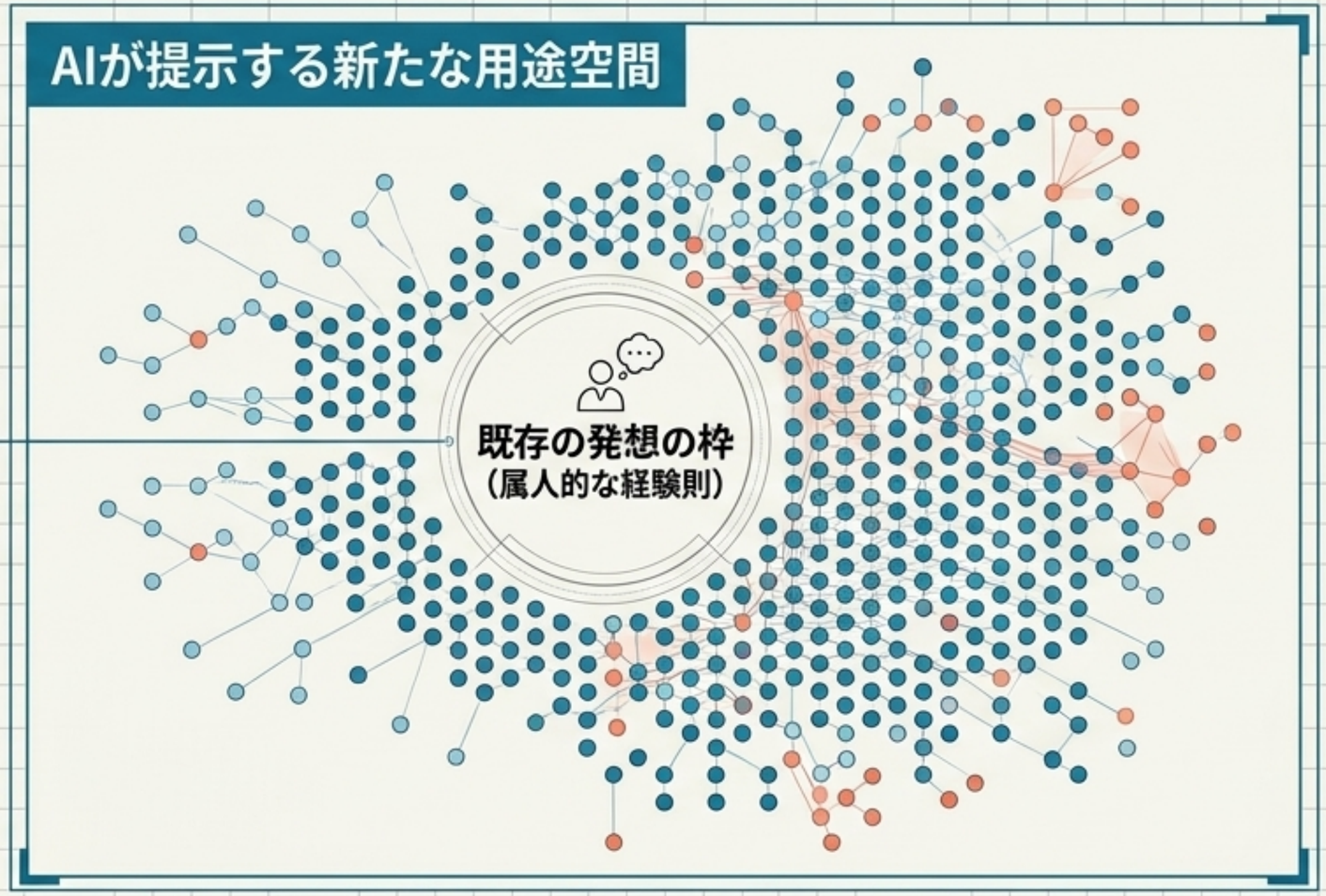
用途探索における「量」と「質」の飛躍

6,000+

AIにより抽出された新たな用途候補の数

40%

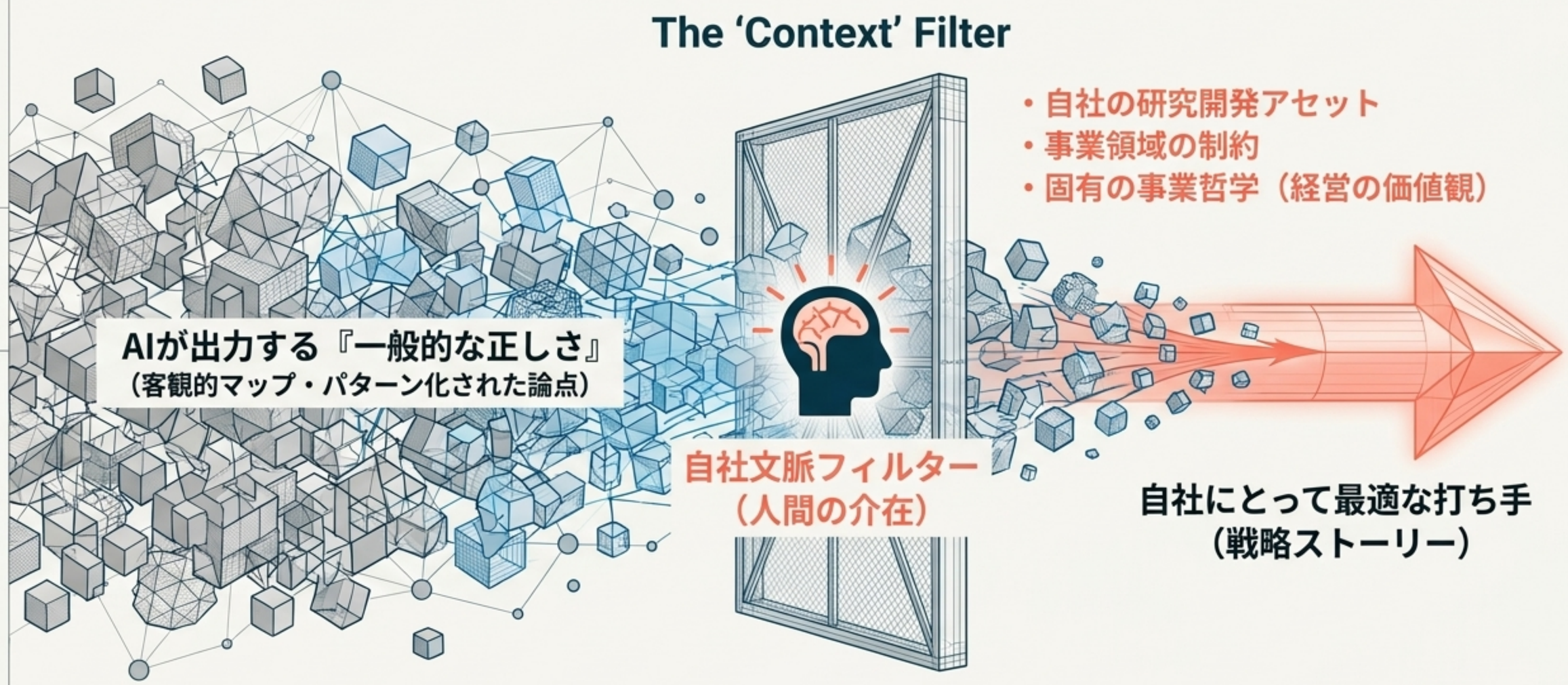
ある材料において候補選別に要する
時間を短縮（従来比で約60%削減）



AIは専門家のアイデアと遜色のない用途候補を短時間で提示する。
人間の代替ではなく、人間の創造性を劇的に拡張するインフラとして機能している。

Gemini Notebook

「一般的な正しさ」と「自社の文脈」の境界線

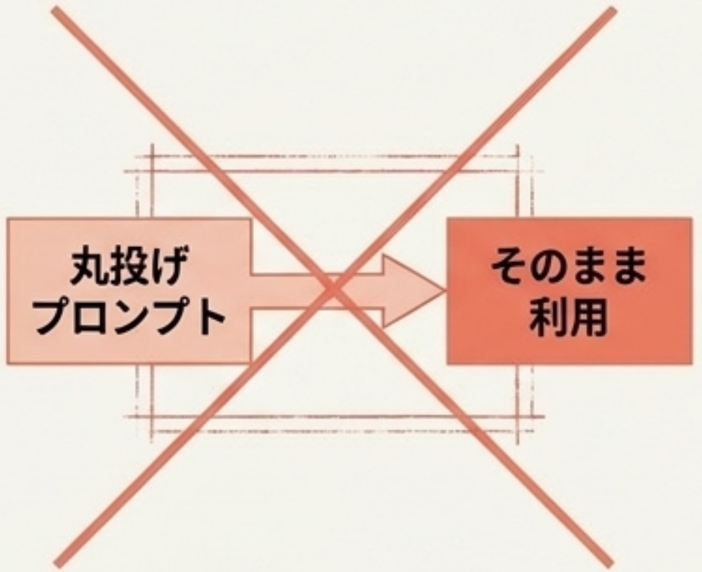


AIが出力するのはあくまでその分野における一般的な正解に過ぎない。
そこに自社の文脈を与え直す過程において、人間が思考し、判断する総量はむしろ増加する。

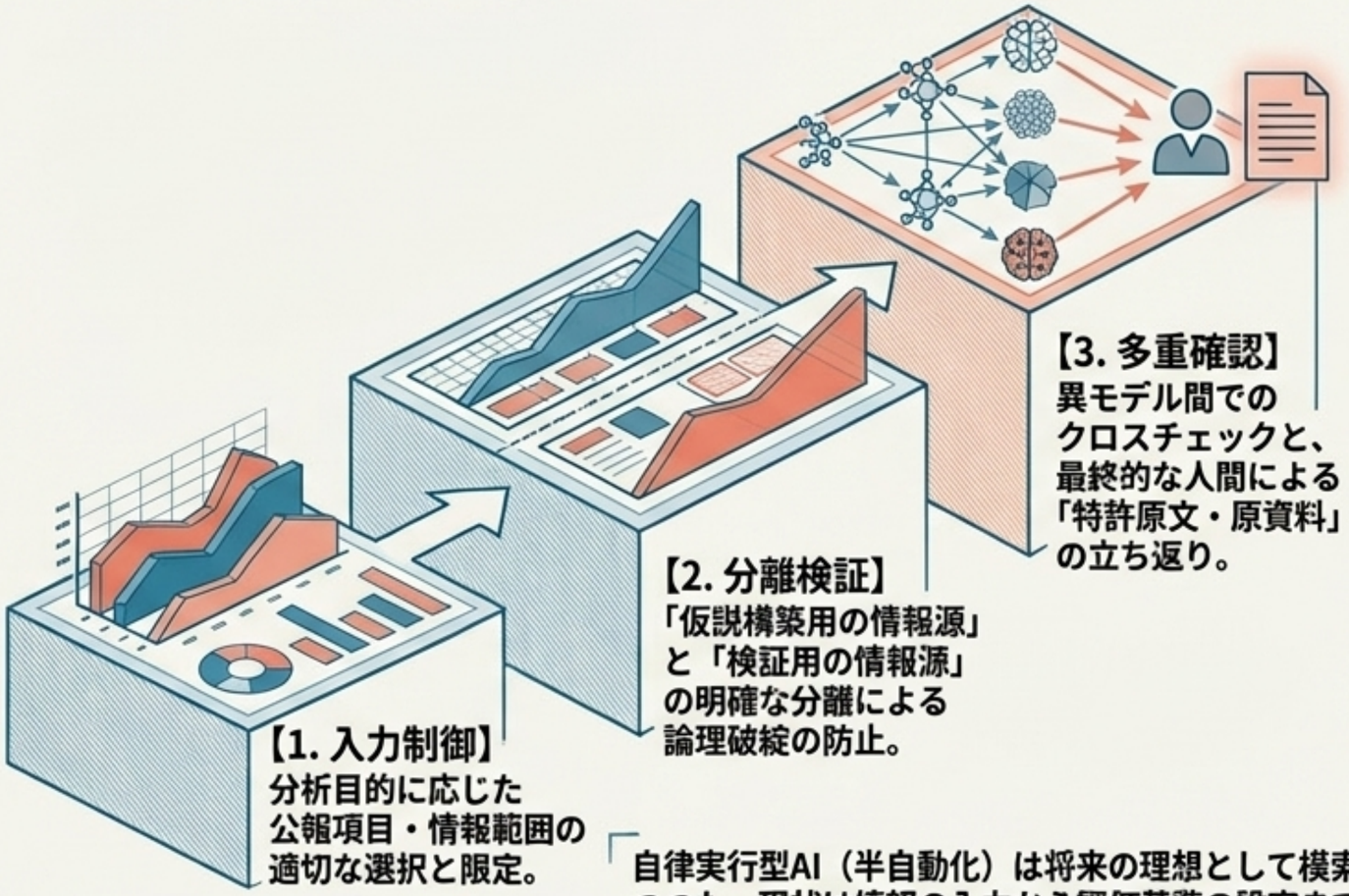
Gemini Notebook

精度と信頼性を担保するワークフロー設計

NG：単一指示による丸投げ ×



人間の介在を組み込んだ段階的な協働設計 ○



【1. 入力制御】
分析目的に応じた
公報項目・情報範囲の
適切な選択と限定。

【2. 分離検証】
「仮説構築用の情報源」
と「検証用の情報源」
の明確な分離による
論理破綻の防止。

【3. 多重確認】
異モデル間での
クロスチェックと、
最終的な人間による
「特許原文・原資料」へ
の立ち返り。

自律実行型AI（半自動化）は将来の理想として模索しつつも、現状は情報の入力から評価基準の設定まで、綿密な設計と人の介在が不可欠である。

Gemini Notebook

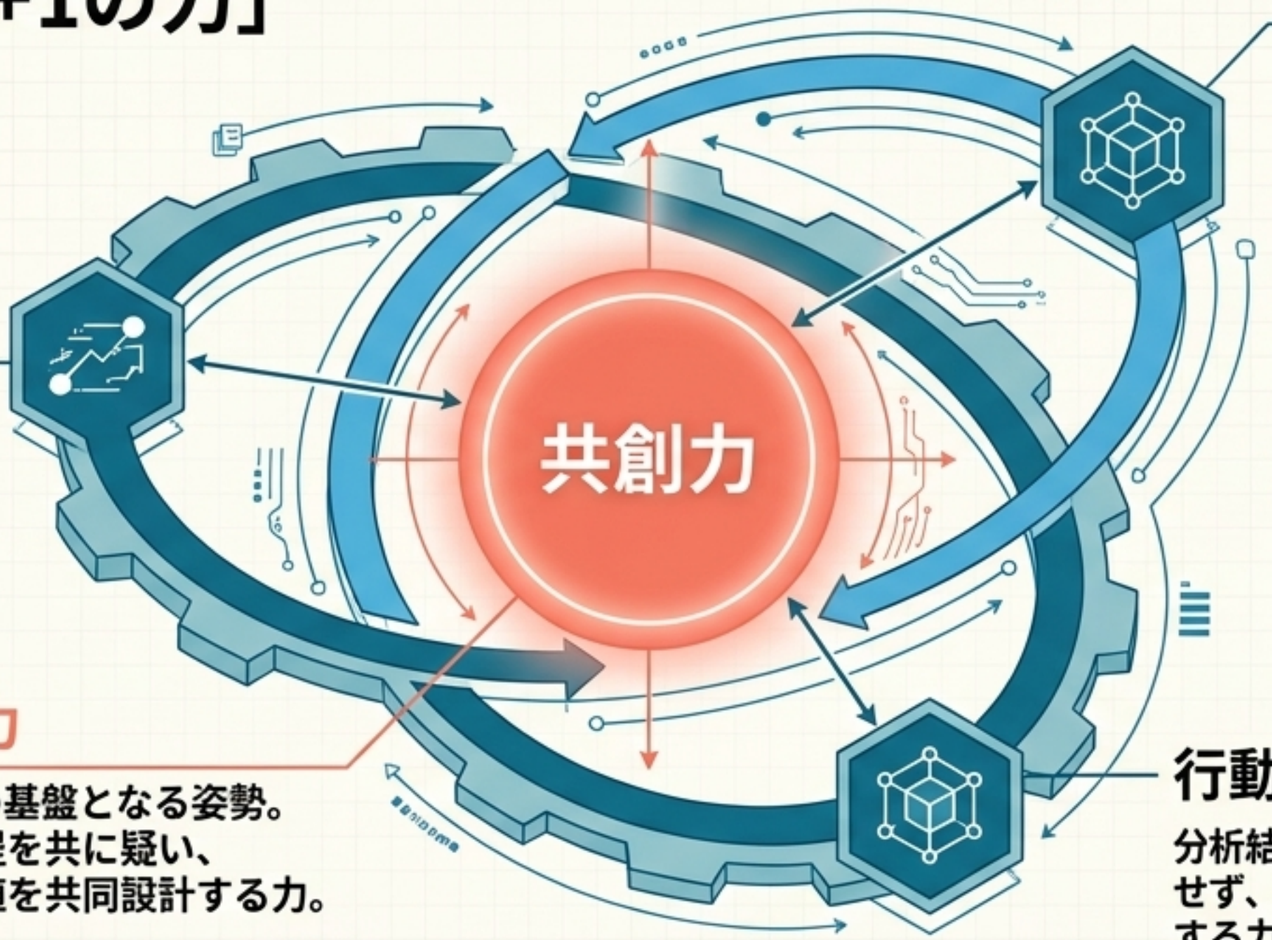
レポート納品から「共創型インテリジェンス」への移行

AIが整理した論点は完成品ではなく、事業側と認識をすり合わせるための「対話の土台」に過ぎない。

	受動的な知財調査アプローチ	共創型知財インテリジェンス
業務の起点	依頼内容に基づく受動的な調査・マップ作成	依頼を「意思決定の問い」へ再定義する判断設計
成果物の位置づけ	出願件数推移や競合動向を示す報告書	判断に基づき、次の事業行動を選択可能にする提案
関与の期間	報告書の提出完了をもって業務終了	事業判断後も施策実行と軌道修正を支え続ける行動伴走
事業側との関係性	依頼者と受託者による形式的なやり取り	事業前提を共に疑い、事業価値を共同設計する共創関係

Gemini Notebook

AI時代の知財アナリストに求められる「3+1の力」



判断設計力

抽象的な相談を『意思決定の問い』へ再定義し、判断の枠組みを設計する力。

行動伴走力

事業判断が下された後も実行現場を継続的にサポートし、変化に伴走する力。

共創力

すべての基盤となる姿勢。
事業前提を共に疑い、
事業価値を共同設計する力。

行動接続力

分析結果を単なる情報共有で終わらせず、具体的な次の事業行動へ接続する力。

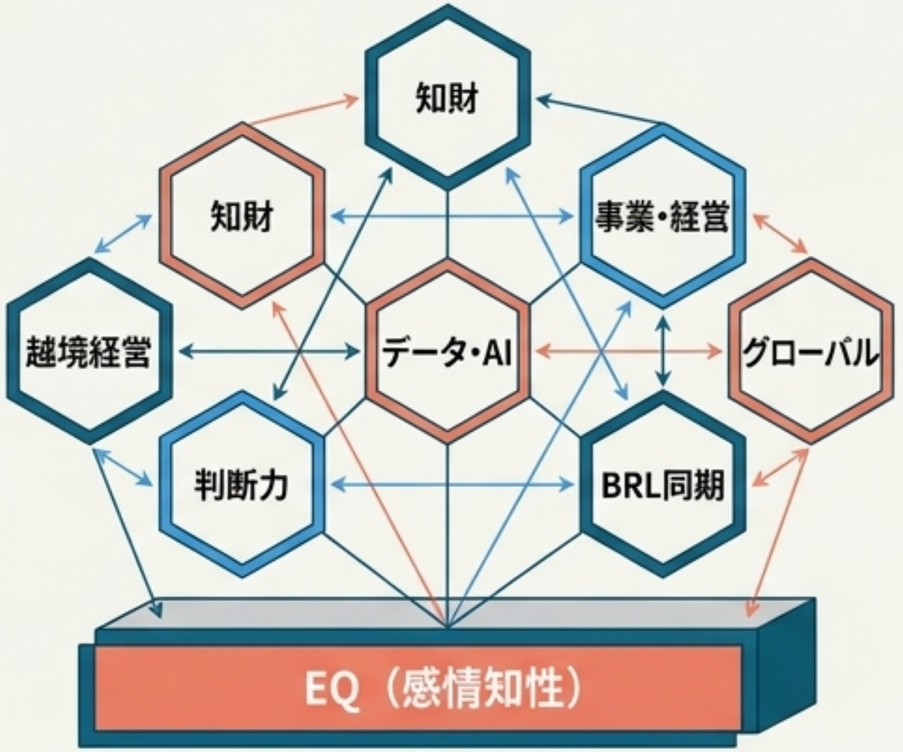
外部の助言者にとどまらず、事業担当者と対等な立場でビジネスモデル策定や新事業創出に関与する。
これが実効性のある知財経営の基盤である。

Gemini Notebook

「IPLの民主化」とポリバレント組織の構築



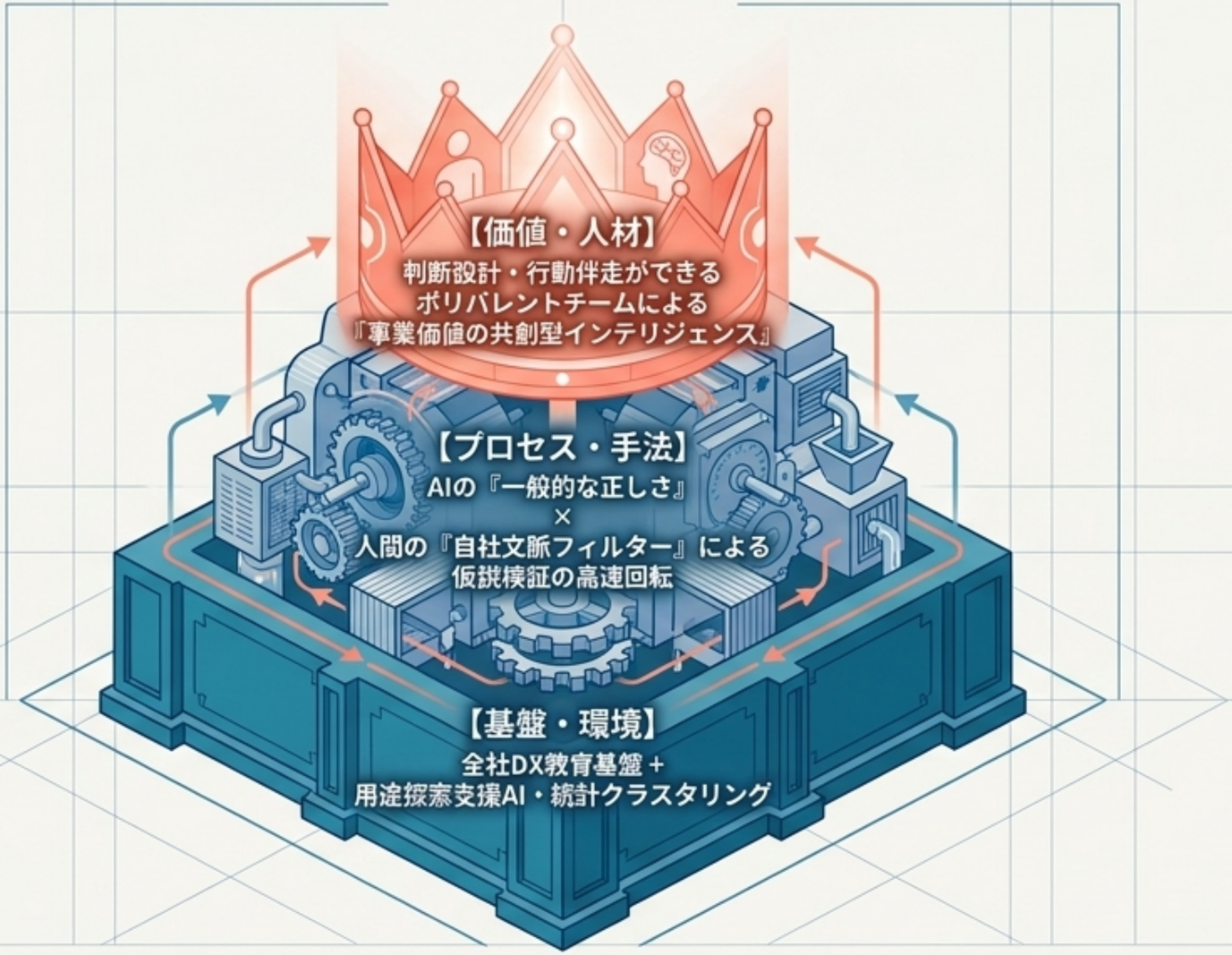
AI支援により知財情報のハードルが下がり、技術・事業部門自らがデータに触れる環境へ（IPLの民主化）。知財部門は両者の時間軸のずれを埋める『橋渡し役』となる。



すべてのスキルを一人に求めるのではない。R&D現場への出向経験やスタートアップ支援の越境経験など、多様なバックグラウンドを持つ「ポリバレント（多機能な）人材」を組み合せ、チームとして組織能力を最大化する。

Gemini Notebook

統合：知財DXによる提供価値高度化モデル



知財DXとは単なる業務効率化ツールではない。ツール、プロセス、そして人材という3つの層が有機的に連動し、知財部門の提供価値を根本から高度化させるための一つの巨大なエコシステムである。

Gemini Notebook

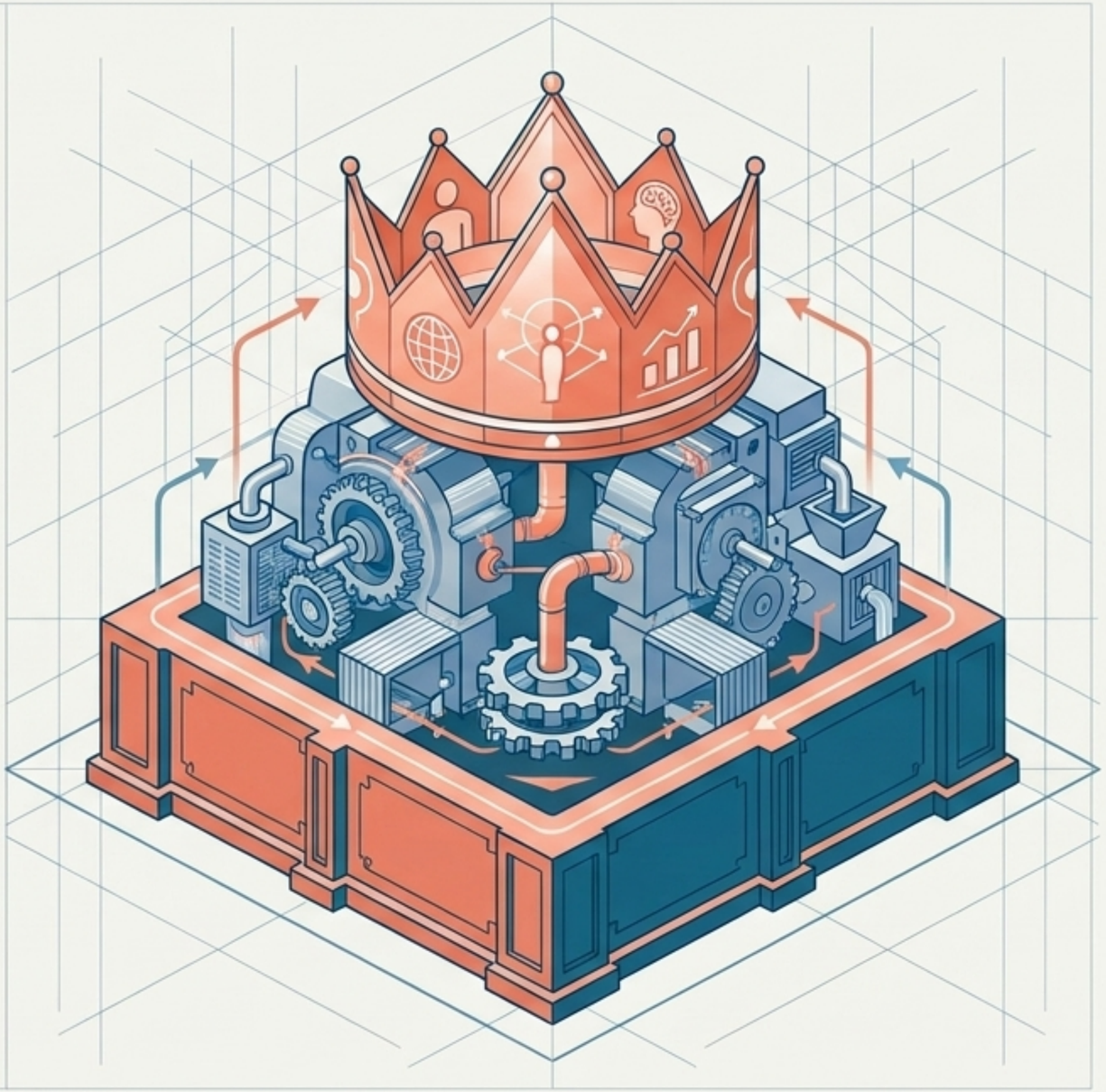
結論：データからインサイトへ、そして行動へ

生成AIの発展により、情報探索の敷居は
かつてなく下がっている。

これからの知財組織が存在感を示す条件は、
単なるデータの可視化にどまることではない。

AIを道具として使いこなしながら、事業の
前提を共に問い直し、施策の実行と事業成果
にまで責任を持って伴走することである。

旭化成・知財インテリジェンス室の実践は、
その確かな青写真を私たちに提示している。



Source: 旭化成における知財生成AI活用 実践と提供価値の高度化（Patsnap Webinar報告

Gemini Notebook